



The Association of Liquid Filtration and Purification Industry

LFPI News Letter

Spring 2012 No.59

「絆」と「襷」



新年度を迎えるにあたり、今年の我が社のキーワードは二文字の漢字としました。一つ目は「絆」。昨年の震災以降余りにも氾濫し食傷気味でしたが、改めて考えてみると、現代の日本の社会でも又我が社の中でも、実に大事なキーワードと思い直しました。そもそもこの文字が使われたのは、昨年震災1カ月後の4月11日に世界の有力新聞に掲載した日本政府からのお礼のメッセージ広告で、この「絆」という漢字一文字の下に感謝の意を各国語で表明したのが、始まりのようです。近年、人との関わりがなんとなく煩わしく、一人の世界に籠るのが流行

りのようでしたが、震災を期に、家族、友達、ご近所等との繋がりの大切さが改めて見直されたと言えます。「絆」は、助け合いであり、チームワークであり、連携であり、人への思いやり、人への感謝などなどを総括した実に含蓄ある言葉です。人は、一人で生きているわけでない、一人で仕事をしているわけでもありません。自己中心から他人の立場を思いやる心が見直される絶好の機会を神様が与えてくれたのでしょうか。会社でも、一つの製品、一つの仕事を完成させるためには、必ず複数の人との関わりが欠かせないはず。所が、近頃の社内を改めて見回すと、一人ひとり技術もアップしキチンと役割をこなしてくれているが、それぞれの繋がりに今一つバインドが弱い。個々の垣根を越えて、もう少し手を伸ばし合い、もっとチームワークを意識することを求めました。

もう一つは「襷」という漢字です。連想出来るのは駅伝です。伝統の襷を掛ける名誉と責任が、少しでも良い位置で次のランナーに何としても繋ぐ気持ちで、顔を歪めながらも走りぬく選手たちに毎年感動させられます。会社も実はゴールの無い駅伝を走っているのと同じです。今働いている人は、会社の長い歴史の中の1区間を任されているのです。ベテランが段々引退していく中で、次の世代へのバトンタッチ即ち襷の引き継ぎ時期にきています。技術という襷、ノウハウという襷、社風という襷、人としての礼儀、挨拶という襷。色々の襷が引き継がれていくのが会社です。この襷リレーを淀みなく行なう事が、会社が長持ちする前提でもあります。昨年、ある新聞社が音頭を取って「100年経営の会」と言うのを発足させましたが、我が社も縁有って末席に名を連ねさせていただきました。創業100年を越える企業か、もうすぐそこに到達する企業が有資格者です。我が社はあと7年で100年を迎えます。設立会員にはキッコーマン、東芝、キリンビールなどの大手企業の他に、その道一筋の中堅中小企業も数多く居られますが、モノ作りをやって来られた企業が多いのが特色です。今、日本の製造業は逆風の最中に置かれていますが、これから100年後は、どういう企業、産業が生き残っていくのでしょうか。

LFPIの会員企業の多くと、100年後も顔が合わせられるようにシッカリ「襷」を繋いでいきたいものです。

日本濾水機工業株式会社

代表取締役社長 橋本祐二

InterAqua2012第3回国際水ソリューション総合展の参加報告

2012年2月15日～17日東京ビックサイトで開催のInterAqua2012 第3回国際水ソリューション総合展に出展しました。3日間の登録者数 45,024 名の内 InterAqua を主目的とした登録者数は 6,097 名であり、LFPI ブースへは、国内外より 316 名が来場し、名刺交換いたしました。今回の出展目的は、①技術相談室の開設 PR、②洗浄・殺菌技術保有企業の製品 PR、③ LFPI 最新出版書籍の PR、としました。

技術相談室では、技術相談員がブースで来訪者に対応しました。LFPI の活動内容の質問、専門技術の相談、会員企業の紹介依頼、など予想以上に多くの来場者に対応できました。LFPI 活動に熟知した技術相談員が説明を行ったため、十分な説明ができたものと考えます。今後、具体的な相談が増えると予想されます。

洗浄・殺菌ガイドブック執筆企業を中心に 7 社が製品展示、3 社がカタログ展示を行い、各社の説明員が来場者の対応を行いました。各社の説明員が熱心に対応してくれたお陰で、来場者は目標の約 200% のである 316 名に達しました。来場者には、水処理関連企業以外の方も多く、韓国、中国、欧米からの人も見られました。説明員との対話を通して、LFPI と出展企業の製品を十分理解されたことでしょう。

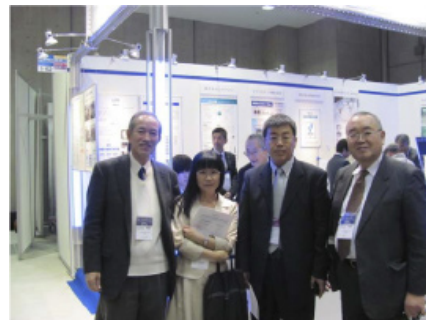
LFPI 最新出版物である洗浄・殺菌ガイドブック、ろ過脱水機ガイドブックの販売では、洗浄・殺菌の関心が高く、見本を見てから購入を決める人が多くありました。

名刺交換した来場者には、お礼メールの配信準備を行っております。出展企業の製品紹介、技術相談室の案内、LFPI 新規入会の案内、LFPI 各種行事の案内、等来場者に LFPI をより深く知ってもらうことに努めます。

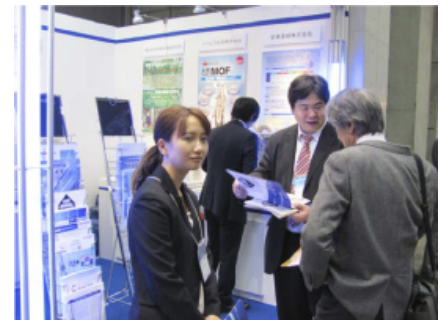
(展示ブース担当 矢部 江一 報告)



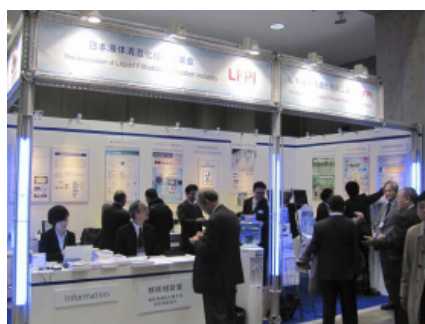
技術相談一号



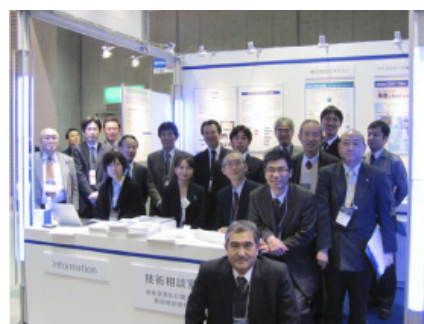
精華大学来訪者



女性の方も熱心に説明



書籍販売も好調



説明員全員集合

LFPI 第20回青年部会講座 (2月17日 中浜下水処理場)

「大阪市における下水処理の歴史」

日 時：平成 24 年 2 月 17 日 (金) 午後 2 時 00 分～

場 所：〒 536-0024 大阪府大阪市城東区中浜 1-17-10

出席者：14 名

冷たい風が強く吹き時折雪が降る中、中浜下水処理場にて、第 20 回青年部会講座「大阪市における下水処理の歴史」が行われた。

講演は大阪市の下水に関しては大阪市建設局の中谷氏、中浜下水処理場で行われている B-DSH プロジェクトについてはメタウォーター株式会社の森氏により行われました。

1. 大阪市の下水に関して (下水道の役割として)

① 浸水対策 (雨水の処理)

雨水を速やかに排出し、浸水災害を防ぐ。

② 水質保全 (汚水の処理)

家庭や工場などから出る下水を処理し河川へ放流する。

簡易処理 (沈砂池→沈殿池) →高級処理 (反応槽→沈澄池) を行い、殺菌後放流される。

また、反応槽での活性汚泥の余剰汚泥は一か所に集められ、濃縮発酵後焼却処分もしくは熔融スラッグになり、レンガなどに使用される。

③ 老朽化対策

大阪市の下水道は豊臣秀吉の太閤下水 (背割下水) が最初とされ、約 150 年の歴史がある。

中浜下水処理場も 50 年以上前に作られた施設であり、下水道の配管、設備の老朽化が進んでいる為、平成の太閤下水と呼ばれる改築が行われている。(平成 25 年度に完成予定)

2. B-DASH プロジェクトについて

国土交通省下水道革新的技術実証事業、中浜下水処理場でも実証実験が行われている。

① 高効率固液分離

浮上ろ材を使用し、高効率で活性汚泥と水を分離する事により、後段の施設への負荷低減、時間の短縮が行われエネルギーの低減が見込まれる。

② 高効率高温消化

生ゴミを活性汚泥に加える事によりメタンガスの発生量を増加させる事が可能。

(メタンガスは燃料として燃焼し発電に利用される、廃熱は汚泥の保温に使用される)

③ スマート発電システム

プロセス状態監視とプライオリティー管理により、使用電力の平準化を行い、発生したメタンガスをハイブリット燃料電池発電により発電、有効利用する。

上記の①②③を組合せてエネルギーの利用を最適化するプロジェクトである。

講演後、中浜下水処理場の施設と B-DASH 施設の見学を行い、交流会は大阪京橋駅傍の「はんなり」で行った。

今回の見学会にご協力いただいた大阪市建設局とメタウォーター株式会社様に感謝申し上げます。

〈安積濾紙株式会社 辻本 政志 報告〉



大阪市建設局の中谷様



メタウォーター(株)の森様



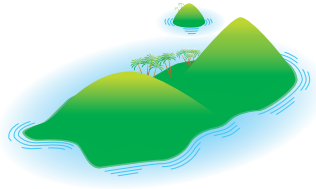
講演会



B-DASHプロジェクト実験プラントに触れた



稼働中の消化ガス発電機



環境・エネルギー委員会主催

「八丈島の環境・エネルギー事情を訪ねて」見学講演会報告

2012年3月1日～3日、環境・エネルギー委員会主催の見学講演会を八丈島において開催いたしました。募集定員15名のところ20名の参加を得て無事盛大に開催ができました。紙上ではありますが関係各位にお礼を申し上げます。

開催に際しまして、この度の震災以来見学を休止している東京電力(株)の八丈島風力地熱発電所の設備・運転を当委員会委員の高久先生のご尽力で見学できました。また、三原中学校校長の山本様(関西金網(株)松木社長の同級生)には、八丈島の案内や手配(八丈町汚泥再生処理センターの見学、宿泊ホテル、島内移動、昼食、会議場手配など)に協力をいただき、今回の見学講演会をつつがなく終えることが出来ました。ここに改めてお礼を申し上げます。

ニュースレターには今回参加していただいた横浜国大の院生3名をお願いをいたしました。若い目から見た素晴らしい投稿になっていると思います。

八丈島の環境・エネルギーの現状に触れて

横浜国立大学 環境安全管理学研究室
井ノ久保 淳一、石井 淳也、大和田 健登

今回、クローズドな地域における環境・エネルギー事情を調査するため、その代表例ともいえる八丈島に向かった。竹芝栈橋から船で揺られること11時間、二つの山(三原山・八丈富士)と雄大な自然を有したその島が、私たちの前に姿を現した。降船後、最初に向かったのが、島の約30%もの電力を賄っている風力・地熱発電施設である。東日本大震災以来、原子力エネルギーからの脱却が叫ばれる我が国において、風力・地熱のような自然エネルギーを用いた発電システムの普及が望まれている。それらを見学できるということに、私たちは胸を躍らせた。



八丈島の自然(三原川)

島の良好な風況を活かした風力発電は、500kWの出力を有している。実際に設備を目の当たりにし、風をエネルギー源としていて、資源の枯渇の心配がないということ、発電時におけるCO₂の排出量がゼ

口だということを改めて実感させられた。同時に、風力発電が日本全体に普及しないことに疑問を覚えた。

また、風力発電施設の隣では、真っ白な水蒸気が湧き上げ、独特なゆで卵臭を漂わせた地熱発電施設が圧倒的な存在感を示していた。環太平洋造山帯上に位置する我が国にとって、地熱もまた半永久的に使用できる国産のエネルギーの1つである。八丈島の地熱発電では、地下1650 mまで井戸が掘られ、地熱貯留層から熱水が取り出されていた。熱水は、気水分離・固



地熱発電所見学の様子

形分除去・pH調整の前処理が行われる。分離された蒸気が、タービンを回し、発電機により電気エネルギーに変換される。このシンプルな方式は「シングルフラッシュ方式」と呼ばれている。タービンを回した後の蒸気は復水され、この際発生する温水の持つ熱を近隣の暖房として利用する「熱のカスケード利用」も確立されていた。一方、分離された熱水は、還元井により地下100 mまで戻され、再び地熱で温められ、循環する形となっていた。地熱蒸気に含まれている硫化水素ガスに関しては、大気に排出される前に硫化マグネシウムとして固化され、廃棄物として処理されていた。このように、単に自然エネルギーを活かした発電システムを有しているだけでなく、熱回収・水循環・大気汚染対策にも配慮した施設であり、環境に携わる身としては、非常に感銘を受ける施設であった。

再生可能エネルギー施設を調査した後は、汚泥再生センターを訪問した。この施設は、2012年4月から島民約8000人が排出した生ゴミやし尿を処理する予定となっている。バキュームカーにより運び込まれたし尿は、曝気・膜処理・活性炭吸着・消毒を行い、浄化される。余剰汚泥は、発酵・乾燥工程を経て、堆肥化されるシステムである。クローズドな地域において、廃棄物に堆肥という機能を持たせて、資源生産性を高め、かつ廃棄物の排出量を減らす試みが見られた。我が国の産業廃棄物の中で、最も多く排出される汚泥削減技術も、未来を背負って立つ私たちの今後の課題であろうと考えさせてくれた。

見学会後は、林薫先生、酒井吉弘先生からご講演いただいた。「八丈島の歩く百科事典」とも謳われる林先生のご講演から、八丈島が歴史的にも自然的にも多くの特徴を持つ島であるということを知った。特に印象的であったのが、光るキノコ（ヤコウダケ）の話であり、自然が生んだ神秘を感じた。八丈島の稀有な生態系を知らされ、「自然との共生」というものも、今後私たちが考えていかなければならない重要なテーマだと意識させられた。

酒井先生からは、地熱発電の特徴や原理、今後の課題等をご教授いただいた。地熱発電の一番の問題点は、蒸気中の不純物がタービンに影響を及ぼすことである。腐食やスケーリングが起り、性能の低下を招くとのことであった。これらを解決するため、酒井先生はショットピーニング等の技術を用いて、耐食性向上の技術開発をされていた。ショットピーニングは大学の講義で聞いた

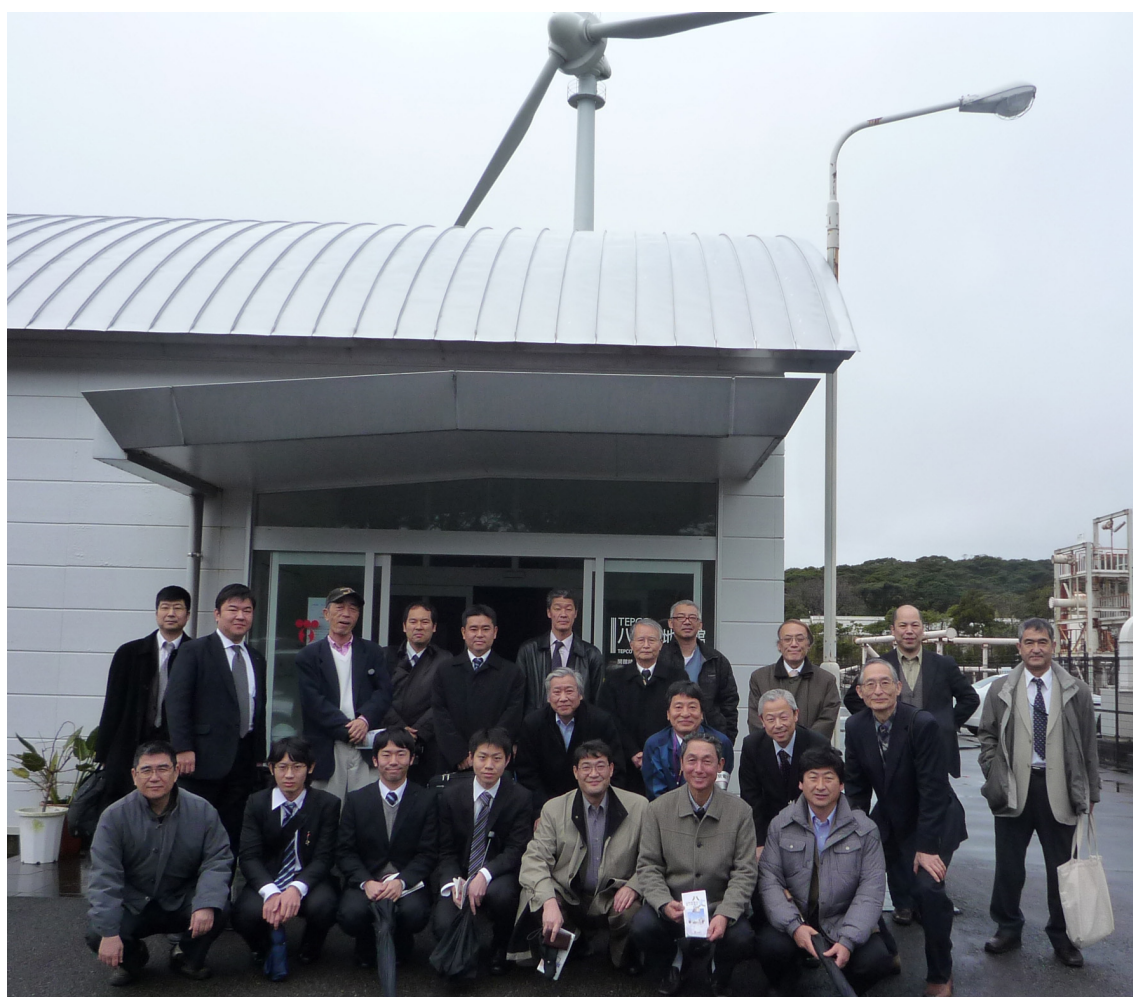


EV車用充電器

ことがあったが、実際に使用されている例をお聞きし、「大学で学んできたことは世の中で活かされている」のだと確信できた。地熱発電は一見シンプルなシステムのように思えたが、その裏側では大変な苦労や工夫が施されていた。問題解決に向けて取り組む姿勢は、技術者としてあるべき像であり、私たちも見習いたい。

滞在最終日、私たちは河川の水質調査のため、地熱発電所付近の三原川に向かった。パックテストによる簡易調査の結果、三原川の河川水中のフッ素やホウ素は環境基準値以下であった。地熱水中のフッ素やホウ素が周辺河川に影響を与えていないことを確認できた。また、調査中に島のいたるところで、電気自動車の充電ポイントを見かけた。再生可能エネルギーで発電した電力で自動車のエネルギーも賄おうという試みがされていて、このような地域内システムが世界で広く普及されるべきだと思った。

今後、原子力エネルギー脱却のために、世界中で再生可能エネルギーの普及が益々望まれるだろう。出力から考えると再生可能エネルギーは、あくまで補完的なエネルギーに留まるが、八丈島のように「エネルギーの地産地消」システムを構築したコミュニティが増加していくことで、持続可能な社会は実現できるのではないかと、今回の調査を通じて強く感じた。最後に、未来の環境事情を真剣に考える貴重な機会を設けてくださった LFPI の皆様を始め、ご講演してくださった酒井先生、林先生にこの場を借りて感謝の意を示します。



八丈島集合写真

東南アジア視察団派遣報告

国際交流委員会は、2012年2月19日～29日シンガポール、ハノイ、クアラルンプールに視察団を派遣した。シンガポールでは、PUBと南洋理工大学を訪問して、膜による下水排水の回収技術、海水淡水化技術の研究状況を見学しました。シンガポールの飲料水をRO海水淡水化と下水排水のRO回収で確保するために、安価で安全な水の製造技術の開発に取り組んでいる。シンガポールは、世界から技術と人材を投入して明確な目標を持って膜処理技術の革新を目指しており、これらの施設の見学は水処理技術開発の在り方の参考になった。

ベトナムのハノイでは、ハノイ土木大学、ハノイ工科大学、ハノイ工業大学とハノイ科学アカデミーを訪問してLFPI会員企業の技術・製品紹介と各大学の研究課題について情報交換を行った（写真1、2）。近年ベトナムは産業政策で多くの工業団地が開発され、日本、韓国、欧米の企業が進出している。進出工場の水処理設備は、日系水処理企業が進出して、きめ細かいサービスを行っている。進出企業は水処理設備の設置、運転指導と定期診断サービスを水処理企業に求め、水処理事業もサービス業であることを求められている。

ベトナムは浄水、下水処理場の整備が遅れており、JICAの支援でインフラ整備が行われている。集中型下水処理場と配管網の整備とともに、分散型下水処理設備の導入を合わせて行うべきであると強く感じた。松本会長がベトナム資源・環境大臣を表敬訪問し、分散型下水・排水処理技術の導入と水処理技術の教育・研修の必要性を進言した（写真3）。ベトナムの資源・環境省は、経済発展に伴う環境悪化対策に指導力を発揮している。LFPI会員企業の保有する分散型水処理技術の技術協力を約束した。

クアラルンプールでは、パームオイル排水の自立型クロードシステムのパイロット設備を見学した（写真4）。

京都議定書で求められたCO₂削減と排水BOD規制の強化でパームオイル排水処理も従来のラグーン処理からの転換を求められている。嫌気性処理で発生するメタンガスを発電に使用するなど経済的にも実用性を高めたシステムとなっている。

プアラルンプールの生活排水処理設備を見学した。住宅デベロッパーがコミュニティ別の分散型生活排水処理設備を設置し、移管を受けた自治体が運転管理している。運転管理が不十分であるため、期待する性能が得られていない。余剰汚泥の発生しない、運転管理の手間のかからない分散型汚水処理技術が求められている。

〈矢部 江一 報告〉



写真1 ハノイ土木大学との交流会



写真2 ハノイ工業大学日本語研修センター



写真3 資源・環境大臣を表敬訪問



写真4 パームオイル排水処理プラント



技術委員のつぶやき話(その8) アルファ・ラバル株式会社 矢野宰平

私と LFPI の関わりから述べます。古いニュースレターや議事録をみると、工業会が生まれて1年後の1998年に技術委員として任命されていますが、会合への出席が悪く一度クビになり、2002年に再度技術委員に復帰しています。また、2004年から幹事の一員として活動しますが、私が巴工業(株)からアルファ・ラバル(株)に移籍した事もあり、一社から2人も幹事会に出席するのは良くないと判断から幹事会を辞めて技術委員会にのみ所属しています。当工業会の設立が1997年ですから、その殆どを技術委員として過ごしたことになります。

「技術委員のつぶやき話」で何を書こうかと迷いましたが、忘れてはいけない事として、昨年3月11日に起きた「東日本大震災」があります。そこで、同地震で起きた津波によって床下浸水した我家のことを書きます。

震災に遭った時は、我家の2階でパソコンに向っていました。地震が起きると直ぐに家の外に出た女房が犬を抱いて、早く降りてきなさいと叫んでいたことを覚えています。地震と同時に停電したのでカーナビで聞いたと思いますが、私が住んでいる九十九里にも数時間後に津波が押し寄せてくるとの情報でした。90歳になる私の母親は、週1回の「ふれあい」に行っただけで家に居りませんでしたので、母親を迎えにいとこと相談し、私、女房、母親、犬と愛車で長女の家へ避難することになりました。

避難する途中のコンビニで、レジが打てないので釣り銭が無いと言われ、多少の寄付をして水や食料を手に入れました。後日談ですが、電気が来ないと、レジが打てずガソリンも手に入らないことに気がつき半分に減ったらガソリンを入れるように改め、犬がうるさかったので車載の犬用のオリを買いました。

八千代市に住む長女の家に向ったのですが、普段1時間くらいで着くのですが信号機が点かないのと避難の車で混雑し8時間以上掛かりました。翌朝、母親と犬を長女に預け、千葉経由で我が家の様子を見に行きましたが途中、徒歩で帰宅する人を大勢見ました。我が家は、建っていましたが、ご近所の車が数台塩水に浸かってダメになったと聞きました。我家一帯は排水をポンプに頼っていますが、ポンプが故障したとの事で、その後、約1ヶ月塩水に浸かっていました。その為に気付いたのですが塩水に強いのは芝とイブキで以外に弱いのが笹とスギナでした。畝で育てていたラッキョウ、ジャガイモ、アスパラガス、人参等は全滅しました。

(次回のつぶやきに続く)



我家の被災状況－床下浸水(塩水)



ネクストビジョンを語る(3)

神奈川機器工業株式会社 ト部礼二郎

ネクストビジョン検討研究会が発足し、早一年半が経とうとしている。二年計画で進めている本会有一些が、当初私自身が考えていた本会は『日本液体清澄化会の次世代のあり方』をイメージしていたが、それとは多少異なる会であるのをこの終盤戦に来てやっと理解したのが事実である。

発足時数点のテーマを決定、『経済環境の激変による会社の生残り』、『ものづくりと技術伝承』、『グローバル社会への挑戦』、『組織論とリーダーシップ』、『循環型社会・持続可能な社会』など、正に当社が抱えている問題であり、また当然私自身も抱えている問題である。それらの諸問題を、旗振り役の中村先生を筆頭にフリーディスカッションする訳である。当然模範解答があるわけでもなく、その回答が一つでもなく、当然複数回答ある。私自身と同年代の仲間達と様々な意見が2時間～3時間掛けて各々の知識の紹介、と同時にそれらが議論される。結果として必ずしも結論がでるわけでもなく、そのプロセスを仲間達と共有するのが現時点での最も重要視すべき事なのであろう。

例年、1月の年始挨拶周り、2月には春節（旧正月）前後に近隣アジアへの訪問、3月には国内の年度末挨拶で巡業する。ただ今年の3月11日には必ず自宅にいる事を決め、本原稿を考えようと決めていた。ご察しのように『あれから一年である』。ここ最近で、最も日本中が静まり返った一分間であり、改めて哀悼の意を表したいと思う。

脱原発による電力不足など、日本のエネルギー問題は正に難局を向かえている。更にホルムズ海峡の封鎖危機、火力発電稼動により原油・天然ガスに依存度を増し、1970年代のオイルショックの再来とも噂されている。一方、当工業会の環境エネルギー部会企画である『八丈島内の地熱発電プラントの訪問と富士電機(株)殿の酒井技師長のご高話』に参加した。日本と島国・温泉文化・水産業などの側面で類似するアイスランドにおいて、この十数年の地熱発電の普及は目覚ましいものであり、国全体の25%を占めているという。日本においては、まだまだ難題も潜在するようだが、今後近未来において、再生可能であり、豊富な国産エネルギーと大地の恵みを利用し、『持続可能な社会の創造』を多いに期待したいと思うと同時に、当工業会並びに弊社としても一役を担いたいと感じる。

結びになるが、上記にもあるよう必ずしも結果に結び付けなくても、あらゆる諸問題のプロセスをディスカッションする時間を大切に、今後更なる知恵と雑学を身につけたいと思う所存である。

広報委員会が様々な視点で情報を発信する「情報アレコレ」も、第6回を迎えました。今回は、筆者の日々の業務とLFPIとの関わりについて改めて考えてみました。

めっき薬品会社に勤務している私にとって、フィルターは業務上ごく当たり前に使用している、欠くことのできない大事なものです。それは後述するとして、皆さんはめっきという言葉にピンと来るでしょうか。

めっきとは、各種材料の表面に金属の薄い皮膜をかぶせる技術（めっき液中の金属を析出させる技術）のことを言い、日本では奈良に都を移した710年頃に仏像にめっきがされたのが始まりと歴史は古く、奈良の大仏に施した金めっきが初期のめっき作品というのは有名な話です。その際のめっきは、今のめっき技術とは異なり、金を水銀で溶かし、仏像に塗布し、火であぶって水銀を蒸発させることで、金だけを残す方法で、水銀中毒が起こりうる、作業者にとってはとても危険な方法でした。

現在では電気めっき、無電解めっき、溶融亜鉛めっきなどの工法が確立され、日本には明治時代に電気めっき技術が導入されてから、金、銀、銅、ニッケル、すず、亜鉛、クロム、パラジウム・・・と多くの金属めっきが行われるようになりました。

身の回りのめっき製品としては、ハイブリッドカー、スマートフォン、半導体関連、二次電池の電極といった最先端分野をはじめ、パソコン、その他の電子部品や家電、家具、食器、アクセサリ（装飾品）、ボタン、ねじ、車、航空機部品などが挙げられ、めっきがなければ我々の生活が成り立たないほどあらゆるものに利用されています。

しかし、実用化当初はめっき液の中に酸化物、めっき反応による副生成物、ゴミなどが多く含まれており、少しの処理で、めっき後の製品に光沢性を保たせることが難しくなっていました。これらの不具合を解消させるために、めっき処理を行いながらろ過する工夫がなされ、今日のめっき浴槽にはろ過機が導入されており、めっき液中の余分なものを取り除くことで品質を向上させる、なくてはならない存在となっています。

めっき薬品会社の弊社ですが、LFPIの中では一般会員で登録しています。それはエープロセスという銅アルカリエッチングの回収リサイクルシステムを構築したことにあります。

エッチングという金属剥離処理により処理液中に銅が蓄積されますが、この液を回収し、銅を抽出し、またフィルターにより不純物を分離精製して得られた液を新たな製品として販売する環境に優しいクローズドシステムです。

この技術がもつて、当時の弊社社長がLFPIの発起人の一人になっています。

さて、現在の私は、というとめっき液を分析する業務を行っています。めっき液に含まれる金属やその他の主となる成分を分析することもあります。液の中の微量成分を測定することもあります。めっき液中の主成分はかなりの高濃度で含有されています。そのため、微量成分の分析を行おうとすると分析機器はこぞって主成分の存在をきらいます。装置にダメージを与えたり、カラムと呼ばれる特定成分を分離するための部品に液を通すことで多大な汚染が生じて、使い物にならなくなってしまふからです。

このため、分析するには種々前処理によって妨害物を除去し、必要成分を取り出す工夫が必要となり、その時に必ずと言っていいほど重宝するのがフィルターの存在です。フィルターなくしては日々の自分の仕事は全うできません。

入社したての頃は、ろ過や清澄化に関わっている意識はありませんでしたが、日常の業務のみならずLFPIの広報委員を仰せつかっている現在は、LFPIとの関わりを強く感じている次第です。

今後ともLFPIをよろしく願いたします。

〈メルテックス株式会社 池島 賢司〉

会 告

LFPI国際交流委員会主催研究会（第二回） 『海外市場向け水処理技術と市場調査報告』

日時：2012年4月9日(月) 12:10～17:45

1) 日本の水戦略と技術

テクノライター代表 岡崎 稔

2) 世界のMBR技術と市場動向

造水促進センター 技術アドバイザー 川崎睦男

3) LFPI東南アジア視察団報告

LFPI 松本幹治、古市光春、矢部江一
アクアテック株式会社社長 衛藤俊司

場所：かながわ県民活動支援センター 305会議室

※詳細はWEB、案内書をご覧ください。

先端技術セミナー

『震災を経て考える「新」水技術』のご案内

開催日時：平成24年5月14日(月)

13:30～17:00(技術講座)

17:15～19:30(技術交流会)

場所：かながわ労働プラザ(JR石川町駅 徒歩3分)

※詳細はLFPIのWEBサイト、案内メールをご覧ください。

編 集 後 記

あの震災から1年が経過しました。私事ですが、ガソリンを慌てて入れに行ったり、子供への汚染をなるべく避けようと水を求めにスーパーに行ったり、自宅では計画停電も体験し、家族で毛布にくるまりながら携帯型の蛍光灯で携帯電話のワンセグテレビを見て過ごした日もありました。こんな形で私生活への影響もうけ、震源地から離れていても、こんなにも自然相手にはもろいものかと痛感し、考え方、価値観がそれまでとは変わったように思います。

復興も進んでいるようですが、茨城にある父の実家はいまだ屋根にブルーシートがかけられており、被災地の方々のご苦労はいかほどのものかとも改めて感じています。

そして、それに追い打ちをかけるように起こったタイの洪水や円高による企業への圧迫と、去年は、まさに日本経済全体が停滞してしまった1年だったかと思えます。

しかしながら、幸いにもここにきて復調の兆しが見え、少しずつ明るい話題も聞こえてきています。正念場を乗り切った勢いで、是非とも明るい年度に致したいところです。

LFPI会員企業そして会員の皆様方のご健勝をお祈りいたします。

〈メルテックス株式会社 池島賢司〉